

# 平子 雄一 Yuichi Hirako

## 「GIFT」



1982年岡山県生まれ、東京都在住。

2006年にイギリスのWimbledon College of Art, Fine Art, Painting 学科を卒業。植物や自然と人間の共存について、また、その関係性の中に浮上する曖昧さや疑問をテーマに制作を行う。観葉植物や街路樹、公園に植えられた植物など、人によってコントロールされた植物を「自然」と定義することへの違和感をきっかけに、現代社会における自然と人間との境界線を、作品制作を通して追求している。ペインティングを中心に、ドローイングや彫刻、インスタレーション、サウンドパフォーマンスなど、表現手法は多岐にわたる。デンマーク、オランダ、シンガポール、台湾、韓国など、国外でも精力的に作品を発表している。

### 主な個展

- 2019 「Memories」 WAITINGROOM (東京)
- 2019 「Dandelion」 Zerp Galerie (ロッテルダム)
- 2018 「Leftover」 第一生命ギャラリー (東京)
- 「BLOOM」 YIRI Arts Taipei Space (台北)
- 「Project N 71」 Tokyo Opera City Art Gallery (東京)
- 2017 「SPROUT」 Galleri Christoffer Egelund (コペンハーゲン)
- 2016 「Our way to the Forest」 Fouladi Projects (サンフランシスコ)
- 2014 「Wooden Works」 hpgrp Gallery Tokyo (東京)
- 2013 「The Thick Forest」 The Drawing Room (シンガポール)
- 2013 「The Leaf Scar」 Waiting Room (東京)
- 2012 「庭先メモリーズ：見えない森」 INAX GALLERY (東京)
- 2011 「庭先メモリーズ：ソング」 トーキョーワンダーサイト本郷 (東京)
- 2010 「庭先メモリーズ」 GALLERY MoMo Ryogoku (東京)

### 主なグループ展

- 2020 「TOKYO☆VOCA」 第一生命ギャラリー (東京)
- 2019 「ミテハナソウ」 佐倉市立美術館 (千葉)
- 「CYGNUS LOOP」 Gallery BATON (ソウル)
- 「SUMMERTIME 19」 Galleri Christoffer Egelund (コペンハーゲン)
- 2018 「MUSUBI」 Galerie Da-End (パリ)
- 2017 「New Works」 The Drawing Room (マニラ)
- 「Après Toronto」 Laroche/Joncas (モントリオール)
- 2016 「Happily ever after」 Zerp Galerie (ロッテルダム)
- 2013 「アートの今：身体記憶」(巡回展) 奈義町現代美術館 (岡山)
- 「創世記」 YIRI ARTS Fujin Space (台北)
- 「VOCA 展 2013」 上野の森美術館 (東京)
- 「東京画II～心の風景のあやもよう～」 東京都美術館 (東京)
- 2011 「アーツチャレンジ 2011」 愛知芸術文化センター (愛知)
- 2010 「群馬青年ビエンナーレ 2010」 群馬県近代美術館 (群馬)
- 「トーキョーワンダーウォール 2010」 東京都現代美術館 (東京)
- 2009 「Amuse Art Jam 09」 京都文化博物館 (京都)
- 「シェル美術賞展 2009」 代官山ヒルサイドフォーラム (東京)
- 2006 「Stepsiblings」 Temporary Contemporary (ロンドン)

### 受賞

- 2020 「I氏賞」大賞
- 2013 「VOCA2013」VOCA 奨励賞
- 2011 「第2回D アートビエンナーレ 2011」優秀賞
- 2011 「アーツチャレンジ 2011」入選
- 2010 「トーキョーワンダーウォール 2010」トーキョーワンダーウォール賞
- 2009 「シェル美術賞 2009」入選

### パブリックコレクション

- LISSER ART MUSEUM (The VandenBroek Foundation) (オランダ)
- Akzonobel Art Foundation (オランダ)
- Jean Pigozzi Collection (スイス)
- 第一生命 (日本)

# 平子 雄一 Yuichi Hirako

## 「GIFT」

平子はペインティングを中心にドローイングや彫刻、インスタレーション、サウンドパフォーマンスなど、多岐にわたる表現方法を用いて、現代社会における自然と人間との境界線を問う作品を制作し続けているアーティストです。特にヨーロッパやアジア圏など、国内外を問わず高い評価を受けています。この度KOTARO NUKAGA では、平面作品や立体作品など平子雄一の新作30点以上を発表する個展を初開催いたします。

豊かな自然環境に恵まれた岡山で生まれ育ち、その後ロンドンに渡った平子は、都会の人々が嗜好する自然が人工的に制御されたものであることに違和感を覚え、以来一貫して自然と人間の関係性をテーマに制作を続けてきました。人間たちが心理的な癒しを求めて身近に置く自然は、観葉植物や街路樹、公園など、自然を模倣した断片に過ぎず、人間の都合に合わせて管理された本来の姿からは大きく逸脱したものです。平子は作品の中で「自然や植物を人や構造物と同等のものとして扱っています。人間の生活圏では植物の力がコントロールされ、必要ないものは排除される存在(=弱者)ですが、それらと同じレベルのものとして扱い混在させることで、人と植物の境界、内と外との境界が曖昧な状況を創造して」といいます。

絶え間なく変化を続ける自然環境にともない、人々の自然に対する価値観も変容していくことに着目し、平子は今回の展覧会に「GIFT」と名付けました。例えば、プレゼントとして贈られた花は当初美しく咲き誇り、その美しさを保つために人は毎日水を替えて手入れを施し飾りますが、時間が経ち枯れてしまえば不要なものとなり廃棄される対象になります。また、果てしない歳月を経た樹木が神格化され御神木として祀られるように、体感的な時間の感覚や利己的な価値観によって自然は選別され、人間に都合よく消費されていくのです。それを象徴するのが、平子の絵画にしばしば描かれる樹木と人間が融合した登場人物。人種や国籍によらず、花は誰しもがもらってうれしい必要なもの、雑草は花の成長を妨げる不要なもの、と成長の過程で無意識のうちに人間が学びとり、判断を下すプロフェッショナルになっていくことを具現化したキャラクターです。一見ユーモラスで可愛らしい姿をしていますが、人間のエゴを体現する存在です。自身の種を絶やさず繁栄するために戦略的に生み出されたフォルムを持つ美しい花も、その価値を見出した人間により咲き誇った最高潮の時点で無残にも刈り取られ切り花となり、時が経てば捨て去られる運命にあることを暗に示唆しています。

平子の絵画に描かれるシチュエーションは、一見現実にはあり得ないものばかりです。樹木がリビングルームを縦横無尽に這っていたり、頭部を木に置き換えられてしまったような人間が登場したり、昼夜の区別すら判然としません。あたかも現実から遠く切り離された夢の中の光景のようですが、絵画の中の世界は平子が普段目の当たりにしている現実世界を組み合わせ、あくまでも現実の延長として存在しており、絵画と現実をつなぎ止めているのは人間と自然の関係性という通底する視座です。寓話的な世界観を通し、自然に対して一方的な価値観を押し付けてはいないのか、改めて私たちに再考を促します。

### 展覧会ステートメント

#### GIFT

自然環境に対する私たちの価値観は、周囲の状況によって常に変化しています。植物や自然に対する人々の価値観が変容する様に着目し、今回の展覧会のテーマとしました。

例えば誰かから「GIFT」として贈られた花。もらった時は美しく、それを飾って水を替え、愛情を注いで綺麗な状態を保とうとします。しかし、時間が経ち枯れてしまうと、かつて美しかった花は廃棄すべき不要なものに変わります。私たちは経済的や心理的に豊かな時には自然環境の保護を謳いますが、困窮した状況においては、自然は単なる資源となり破壊の対象となります。

今回発表する作品には、多角的に解釈可能なエレメントを配置しています。始まりと終わり、破壊と再生、曖昧さと明確さ…これらは全てサイクルであり、時や背景によってその解釈は常に変化します。私たちが理想とする植物や自然を「GIFT」と仮定し、どの地点で「GIFT」となり、またそれがいつ「GIFT」ではなくなるのか、その境界線について作品制作を通して考察していきたいと思えます。

平子 雄一



V R



展覧会PV